

# チャールズ・ディケンズ『デイヴィッド・コパフィールド』 —— イギリスの世態 ——

井 畑 公 男

附属高等学校天王寺校舎

(平成13年7月23日 受付)

異文化理解という言葉が使われるようになって久しい。諸事万般が文化につながるかに思え、事に接してみて浅薄に感じられることが多い。しかし、いささかでも、その深奥に入りたければ、言葉を学び、珠玉の名作を読むのが有効な一方法と考えられる。優れた文学作品であれば、そこに、ある総体的なものが十全に表されているのである。例えば、谷崎潤一郎の『細雪』は日本、日本語というものを深々と表現しているものと言える。同様のことが、国民的作家と言われるチャールズ・ディケンズ『デイヴィッド・コパフィールド』についても言える。これを読むことによって「イギリス的なもの」に接することができる。高校生にとって、沈潜でき、楽しむことのできる世界がここにある。

キーワード：描写， 絵画， 都市

## I はじめに

Balzac regarde et raconte; le choix de l'objet sur lequel tombent ses regards lui importe peu, il n'a que le souci de tout regarder et de tout dire.

Emile Zola, *Mes haines*

バルザックは見つめて、語る。そのまなざしをどの対象に向けるかなど、彼にとってたいして重要でない。ひたすらすべてを見つめ、すべてを語ることに心をくくだの。

エミール・ゾラ『わが憎悪』

膨大な『ルーゴン・マッカール叢書』を残したこのゾラの、同じく『人間喜劇』という一大小説群を書いたバルザックに対する制作態度を貫く評言は、ほぼ同時代の海峡を渡ったイギリスの国民的作家といわれるチャールズ・ディケンズにもあてはまるのではないか。二人とも、まず生活において挫折があり、パリとロンドンという都会でそれぞれ成功しようと奮闘し、バルザックはそれが不完全なまま生涯を終え、ディケンズは一応の成功裡にその人生を終えたかに思われる。また二人とも当時の出版、ジャーナリズムの世界でその文学的なスタートを始めている。それに二人は作品としてほとんど残さなかったが劇壇というものを多少とも知っている。ディケンズが公開の自作朗読に精力を使い果たしたこととか、バルザックが若い頃に劇作に手痛い挫折を経験しているなどというのは、今日、小説の全盛期と考えられる時代の代表的作家のエピソードとして興味深く、また時代における小説の役割を考えるうえでも大いに参考になることである。さて問題は時代的なこと、外国語の障害を乗り越えて、おもしろく読めるかというところにあるであろう。まずはディケンズについて最も人気があるとされている作品を瞥見することから見てみたい。

## II ディケンズとクリスマス

バルザックとディケンズに共通することのひとつに二人とも多作家ということが挙げられる。これはひとえに成功しようとする芸術家の欲望、不安の為せる業と置いていいであろう。小説が言葉による絵画だとすれば、多作することによって成功者になろうとするものは見ることから始め、見たことを言葉で描き、そしてその反響を伺うしかあるまい。ディケンズの『クリスマスブック』の一番目に書かれた『クリスマス・キャロル』は彼から見て成功作であり、世界少年少女文学の代表作と言ってよく、そこにディケンズの特徴が現れていると考えて差し支えないであろう。『クリスマス・キャロル』はイギリス版守銭奴の回心物語と言ってよく、時期をクリスマスに据え、題名の通りクリスマス・キャロルが響き渡る、すこぶる楽しい作品である。この作品でディケンズが成功した所があるとすれば、それはスクルージという守銭奴という典型的な人物造形であり、イギリス庶民が一年に一度、とても楽しみにしているクリスマスの一家団らんの情景の活写の二つであろう。まずはスクルージの人物造形から見てみたい。

Oh! But he was a tight-fisted hand at the grindstone, Scrooge! a squeezing, wrenching, grasping, scraping, clutching, covetous, old sinner! Hard and sharp as flint, from which no steel had ever struck out generous fire; secret, and self-contained, and solitary as an oyster. The cold within him froze his old features, nipped his pointed nose, shrivelled his cheek, stiffened his gait; made his eyes red, his thin lips blue; and spoke out shrewdly in his grating voice. A frosty rime was on his head, and on his eyebrows, and his wiry chin. He carried his own low temperature always about with him; he iced his office in the dog-days; and didn't thaw it one degree at Christmans.

(大意：驚いたことに、スクルージは挽きうすをしっかりと握った手のような男だった。ぎゅうと握り、強く振り、しっかりと掴み、こすり取るような、貪欲な罪深い爺じいだった。火打ち石のように硬く、とげとげして、どんな鋼を打ちつけても、大きく燃えあがる火がついたことはなく、牡蠣のように、こっそり、閉じ籠もり、孤独だった。身内の冷たさが顔かたちを凍らせ、とんがった鼻をこごえさせ、頬を萎びさせ、歩き方をぎこちなくさせた。目は赤くなり、薄い唇は青くなり、きしるような声で、厳しくどなった。白い霜が頭、眉毛、尖った顎に降りていた。いつも、このような冷たさを携えていた。盛夏に事務所が凍り、クリスマスにも少しも暖かくなることはなかった。)

畳みかけるように言葉が費やされ、頑固で吝嗇な老人が戯画化されている程に描かれる。もうこれ以上冷たく、頑なになることはできない位、比喩を、それも自然のそれを利用して描かれている。実際のロンドンのシティにいたかもしれない人物というよりも、お伽話にでも出てきそうな雰囲気をも漂わせている。必ずしも子供むけに書かれたとは言えないらしいこの『クリスマス・キャロル』が子供向けに書かれた作品と受け取られる理由はこのスクルージの描写にも伺える。

さて、この梃子でも動かぬ勤勉で吝嗇なスクルージはどのように回心していくのであろうか。作品冒頭にかつての同僚のマーレーが死んでいることが強調するように確認される。スクルージにとっては、長年の同僚、マーレーにはスクルージしか財産の相続人いないという設定は二人とも孤独で、スクルージの強欲の一つの添え物になる。そしてクリスマスを祝うことをスクルージが嘲笑する場面を三つ畳みかけるように作者は描く。スクルージ

の甥が彼をクリスマスの夕に招待すべくやってきてお祝の言葉を言うのを問答無用というばかりに馬鹿扱いし、クリスマスを機に慈善をスクルージに願いでる二人の紳士をにべもなく追い払うところ、霧が深く、いよいよ冷えこむ中、誰かがスクルージの仕事場にクリスマス・キャロルを歌って祝福しようとする、物差しで追い払おうとするスクルージ。どれも、これ以上ない位、クリスマスを祝うことに対する意味のなさを罵倒している。この後スクルージはいつも通り憂鬱な居酒屋でひとり夕食を取ると、これまた暗い家、彼しか住まない部屋の余った家に帰る。庭は暗く、霧と霜で包まれ暗い雰囲気沈む。まず最初の異変。戸のノッカーがマーレーの顔に見える。

Marley's face. It was not in impenetrable shadow, as the other objects in the yard were, but had a dismal light about it, like a bad lobster in a dark cellar. It was not angry or ferocious, but looked at Scrooge as Marley used to look: with ghostly spectacles turned up on its ghostly forehead.

(大意：マーレーの顔。庭にあるもののように暗い影に沈んではいず、暗い貯蔵庫の腐ったえびのように、まわりがぼんやり光っている。怒ってもいず、猛々しい表情でもなく、生きたとき同様スクルージを見つめている。気味の悪い眼鏡を気味の悪い額に乗せて。)

もうこれは幽霊が出たも同然。しかしスクルージが目を凝らすと顔はノッカーに戻る。何もなかったと馬鹿にしながら戸を閉めると、戸の音が反響して雷のように家中に響き渡る。スクルージは家中を回って何もないことを確かめると夜衣を着る。わずかな火をともし暖炉のタイルで描かれた聖書の物語の絵のなかにマーレーの顔が現れる。一笑に付すが今度は使っていない、吊した呼鈴が動き、鳴り始め、音が大きくなるにつれ、家中の呼鈴が鳴る。呼鈴がいっせいに鳴り止むと、鎖の音が下の方から聞こえる。それが階段を昇り、戸口まで来る。顔色が変わるスクルージの前にマーレーの幽霊がその姿を現す。その死のような冷たい目でみつめられスクルージはぞっとする。相手を確認めマーレーの用向きを聞く。恐怖で気を失いそうになるスクルージはマーレーの言うことを聞き始める。スクルージは跪いて手を合わせる。

"Mercy!" he said. "Dreadful apparition, why do you trouble me?"

"Man of worldly mind!" replied the Ghost, "do you believe me or not?"

"I do," said Scrooge; "I must. But why do spirits walk the earth, why do they come to me?"

"It is required of every man," the Ghost returned, "that the spirit within him should walk abroad among his fellow-men, and travel far and wide, and if that spirit goes not forth in life, it is condemned to do so after death. It is doomed to wander through the world—oh, woe is me!—and witness what it cannot share, but might have shared on earth, and turned to happiness!"

(大意：「お慈悲を。恐ろしい幽霊どの。どうして、私をお苦しめなさるのですか。」)

「世俗まみれの者よ。私の言うこと聞くかね。」とマーレーの幽霊。

「聞きます。いやきっと。でも幽霊の方々はどうしてこの世を散歩なさったり、私共のところにお出でになるのですか。」

「人は、その内なる霊が同胞の中を広く回らなくてはいけないのだ。それも遠く方々にじゃ。生存中にそうできなければ、死後そうする運命になる。こうしてさまようのが、わしの定め、ああ悲しい、生前一緒になって喜ばせられるようなこと、いまはどうすることもできず見ているだけ。』)

ここに人の友情、愛、慈善、幸福の追求等が広く、長い時間の間になされるのが願わしいと暗示されてばかりでない。この後の物語の展開がマーレーの悔恨からスクルージの回心へと進む発端が認められる。時間がないという幽霊のマーレーは3人の幽霊の登場を予告する。スクルージはその時、幽霊とともに過去、現在、未来の親しい者たちの姿、クリスマスの風景、自分の死などを見て自分を省みる。読んで楽しむべきはそれらの光景である。

マーレーの予告通りに現れた「過去のクリスマスの幽霊」に連れられてスクルージは自分の生まれたところに来るのである。見る光景は過去の影だから自分たち二人は気づかれないと幽霊は言う。スクルージは自分がよく知っている光景を見て、このように思う。

The jocund travellers came on; and as they came, Scrooge knew and named them every one. Why was he rejoiced beyond all bounds to see them? Why did his cold eye glisten, and his heart leap up as they went past? Why was he filled with gladness when he heard them give each other Merry Christmas, as they parted at cross-roads and by-ways, for their several homes? What was Merry Christmas to Scrooge? Out upon merry Christmas! What good had it ever done to him?

(大意：陽気な連中がやってきた。近づくスクルージは皆よく知っていて一人一人名前を言うことができた。その姿を見ると、どうして、このように途方もなく嬉しいのだろう。皆が歩いていくと、どうして冷たくなった自分の目が輝き、心が踊るのか。皆が道が交差し分かれているところで、別れの挨拶に、「クリスマスおめでとう」と言い合うのを耳にすると、どうして胸が嬉しさで一杯になるのだろう。「クリスマスおめでとう」が何程のものなのか。そんなもの糞くらえ。何の得になったというのだ。)

スクルージは「クリスマスおめでとう」という言葉を罵倒してはいるものの、もうすでに冷たい吝嗇漢の心は親しいものたちの出会いの暖かさに溶けはじめていい。そして学校で一人、夢中になって『千一夜物語』、『ロビンソン・クルーソー』などを読みふける子供姿の自分を見せられスクルージは泣く。次に幽霊はスクルージが徒弟として奉公した店、老フェジウィッグの店のクリスマスを思い出させる。

"Hilli-ho!" cried old Fezziwig, skipping down from the high desk with wonderful agility. "Clear away, my lads, and let's have lots of room here! Hilli-ho, Dick! Chirrup, Ebenezer!"

(大意：「おーい」と老フェジウィッグは大きな声で言うとびっくりするような軽さで高い机から飛び降りた。「さあ皆、片付けるんだ、ここを広くするんだ。おーいディック。楽しくやろう、エブニゼル。)

エブニゼルとはスクルージのファースト・ネームでこのように親しく呼ばれるのはこの位のものである。どこの店のクリスマスでも見られそう光景を、ささやかだが、すこぶる明るく、楽しく、勢いよく、一夜の宴が始まる雰囲気醸し出されている。そこに、一同が繰り出すように登場する。

In came a fiddler with a music-book, and went up the lofty desk, and made an orchestra of it, and tuned like fifty stomach-aches. In came Mrs. Fezziwig, one vast substantial smile. In came the three Miss Fezziwigs, beaming and lovable.

(大意：そこに楽譜を持ったヴァイオリン弾きが入ってきて、高い机に乗り、楽隊になった気持ちで、胃痛が50人集まったような音を出して調絃し始めた。次にフェジウィッグ嬢

が満面の笑みを浮かべ、三人の娘が愛らしい顔を輝かせ入ってきた。) )

以下、娘に振られた6人の青年、店で働く青年男女、パン屋の従兄弟を連れてお手伝い、料理女と親しい牛乳配達夫、向かいの小僧、女主人に耳を引っ張られた二軒隣のお手伝い、要は、なんの別隔でもなく続々と楽しそうに、仕事が終わった店の中に親しいものが一同集合し勢揃いといった趣である。何か雑然としたなか、一斉に20組の踊りがはじまる。狭い中、エネルギー溢れる舞踏会が続く。酒、ケーキ、パイ、ビールも出される。

この雑然とした、しかし和気愛々としたエネルギーあふれる舞踏会は12時になると終わる。これを見ていたスルージは「老フェジックが皆を楽しみ気持ちさせるのは一財産にも値する大切なことだ。」と幽霊に言う。時間がなくなった幽霊は若いスルージに恋人だった娘に会わせる。

“It matters little,” she said, softly. “To you very little. Another idol has displaced me.”

(大意:「何でもないの。あなたにとっては。別のいい人が私を押し退けたわ。)」

「いい人」というのは、お金のことで、娘はスルージの生き方が変わったとなじり、身を引くと告げる。これを見ていたスルージは「これ上見せてくれるな。」と幽霊に懇願する。いまの彼は悔恨にさいなまれているのである。幽霊はこれに耳をかさず、娘の現在の幸せな家庭の光景を示し夫との会話を聞かせる。そこに現在のスルージの姿が浮かび上がる。

“I passed his office window; and as it was not shut up, and he had a candle inside, I could scarcely help seeing him. His partner lies upon the point of death, I hear; and there he sat alone—quite alone in the world, I do believe.”

(大意:「店の前を通り過ぎたんだ。閉まっていなかったので、中が見えてしまったが、スルージは蝋燭一本で仕事をしていたよ。なんでも相棒が死にかけているらしい。一人だけでいたよ。まったく。)」

孤独なスルージの姿が際立つだけでなく、舞踏会、家庭の団欒と並べて示されると、その陰惨さ、冷たさが感じられてくるようになる。「行ってくれ。もとに帰してくれ。もうつきまとってくれくな。」とスルージは耐えられなくなる。

次に登場した現在のクリスマスの幽霊はスルージに部下の書記クラチット一家のクリスマスの様子を見せる。

Then up rose Mrs. Cratchit, Cratchit's wife, dressed out poorly in a twice-turned gown, but brave in ribbons, which are cheap and make a goodly show for sixpence; and she laid the cloth, assisted by Belinda Cratchit, second of her daughters, also brave in ribbons; while Master Peter Cratchit plunged a fork into a saucepan of potatoes, and getting the corners of his monstrous shirt-collar (Bob's private property, conferred upon his son and heir in honour of the day) into his mouth, rejoiced to find himself so gallantly attired, and yearned to show his linen in the fashionable Parks.

(大意:するとクラチット夫人が二回裏返しにして使っている服を着て、とてもいいリボン、安い、6ペンスの割には派手だつものをつけ着飾って出てきたのです。夫人は二番目の娘のベリングを、彼女もリボンをつけていて、手伝わせ夕食の準備をしていたのです。その間、息子の若主人ピーター・クラチットはフォークでじゃがいもの鍋の焼け具合を見て、ぶかぶかのシャツ(ボブのお古で、クリスマスのために与えられた)の襟を口にくわ

え、立派な服装を着て御満悦になり、これを着て社交場で見せびらかしたくてたまらなかったのです。)

ここに見られるのは、慎ましいながらも、それなりに、精一杯クリスマスを祝おうとする庶民の一風景である。子供たちが集まり、料理を楽しみ、クリスマスのお祈りをする。ティムという病弱で足の悪い子供がでてきて父親ボブ・クラチットが一番、この子を心配する。これを見ていたスクルージは「幽霊様、この子、生きていけるでしょうか。」と今まで感じたこともないような強い関心を持って聞く。幽霊はそう聞くスクルージを「人が死ねば余計な人口が減る。」と言ったのではないかとなじり、スクルージはうなだれる。

さて未来のクリスマスの幽霊はスクルージに彼の死後の様子を見せる。

“This is the end of it, you see? He frightened every one away from him when he was alive, to profit us when he was dead! Ha, ha, Ha!”

(大意：こんなふうになるんだね。あいつが生きていた時はみんな恐くて寄りつかなかったけど、死ぬと、こうして儲けさせてくれるんだね。)

これはスクルージの死後、その遺留品を漁った泥棒の言葉で、ハイエナのようなものたちに襲われる、有りえるかもしれない自分の未来にスクルージはまたもぞっとする。彼は悔い改める時間がまだ残されているのである。この泥棒たちの描写はこのお伽話のなかで異様にリアリティがある。ディケンズの実際の見聞を思わせる。

### Ⅲ 牧歌的世界

『クリスマス・キャロル』のスクルージの人物造形に大いに貢献しているのは幽霊の存在であろう。透明な幽霊、過去、現在、未来といった時間軸のなかで最大限の自由を獲得している。しかし、スクルージは回心という変化を通過するものの、どこか非人間的なのである。これと同様のことが自伝的作品、ディケンズが気に入った小説『デイヴィッド・コッパーフィールド』の主人公デイヴィッドについても言える。父の死、母の死、学校、徒弟修行、就職、結婚、妻の死、再婚、作家としての成功と物語の枠が有りながらデイヴィッドは一向に成長しないのである。これは、おそらく、時間をかけ内省することが少なかったためと思われる。小説の舞台に劇に出てくる人物を登場させることからくる平板化と考えられる。しかし、時としてその舞台は幽霊が出るようなす気味悪い館のような場合があるかと思えば、海岸の近くにあるかも知れない次のような幻想的な素晴らしい舞台のときもあるのである。ロンドンという都会を描くことの多かったディケンズにすれば、珍しいことではあるまいか。何か子供時代のかれの体験を思わせる。

“That’s not it?” said I. “That ship-looking thing?”

“That’s it, Mas’r Davy,” returned Ham.

If it had been Aladdin’s palace, roc’s egg and all, I suppose I could not have been more charmed with romantic idea of living in it. There was a delightful door cut in the side, and it was roofed in, and there were little windows in it; but the wonderful charm of it was, that it was a real boat which had no doubt been upon the water hundred times, and which had never been intended to be lived in, on dry land. That was the captivation of it to me. If it had ever been meant to be lived in, I might have thought it small, or inconvenient, or lonely; but never having been designed for any such use, it became a perfect

abode. (CHAPTER 3 *I have a Change*)

(大意：「あれがそうなの」と私は言った。「あの船のようなのが。」)

「あれですよ、デイヴィ坊っちゃん。」とハムが答えた。

これがアラジンの宮殿、大鳥の卵であっても、中に住んでみるという夢のような思いにこれほど有頂天にならなかつたと思うのです。中は楽しげな扉が付けられてあり、屋根もあり、小さな窓も作られているのです。素敵なのは間違いなく、これが何度となく海に浮かべられた真正正銘の船で、陸の上で住むように考えられなかつたのです。そう思うと、うっとりとなつてしまいました。人が住む家として作られていたら、ちっぽけな、扱いにくい、捨てられたものと思つたでしょう。家にと考えられなかつたにせよ、今は申し分ない家なのです。)

乳母のような家政婦のペゴティに連れられて、彼女の兄の住むヤーマスに来るところだが、兄のペゴティの甥ハムに出迎えられるのである。周囲には空、海、川、平原の他、何もなく、黒い船が一そう高いところにあるばかりなのである。煙突から心地よく煙りが昇っている。誠に、いとも簡単に、慎ましく生きる庶民的な漁民一家をさりげなく提示する前置きとしての、しかも幻想的な気分に浸らせる描写と言つていいであろう。自然に囲まれ人はそれと調和して生きているという十分な暗示に満ちている。中に入ると一層デイヴィッドは目を見張るのである。描写が一層、こまやかになる。

It was beautifully clean inside, and as tidy as possible. There was a table, and a Dutch clock, and a chest of drawers, and on the chest of drawers there was a tea-tray with a painting on it of a lady with a parasol, taking a walk with a military-looking child who was trundling a hoop.

(大意：なかはとてもきれいで、きちんと整理されていた。テーブルがありオランダ時計があり、たんすも置かれていた。その上には盆があり、それには兵隊さんの格好をした、輪まわしをしている子連れ、日傘をさして歩いている婦人の絵が描かれていた。)

満ち足りた生活があり、行き届いていて、異国情緒、都会の匂いがしないでもない。しかし、デイヴィッドが寝ることになるベッドをペゴティに見せられると、そこには紛れもなく海の匂いがするのである。匂いは慎ましくきれいなのである。

It was the completest and most desirable bedroom ever seen—in the stern of the vessel; with a little window, where the rudder used to go through; a little looking-glass, just the right height for me, nailed against the wall, and framed with oyster-shells; a little bed, which there was just room enough to get into: and a nosegay of seaweed in a blue mug on the table. The walls were whitewashed as white as milk, and the patchwork counterpane made my eyes quite ache with its brightness.

(大意：それは申し分のない好ましい寝室でした。船尾に作られているのです。小さな窓があり、それは舵が通つていたところで、壁には私の背たけに合うよう、小さな鏡が打ちつけてあり、牡蠣の貝殻で縁どられてあるのです。小さなベッドはちょうど私が入れるぐらゐの大きさで、机には海草が束ねて青い筒状の容器に生けられていたのです。壁はどこもきれいに白に塗られてあり、端切で作つたベッドカバーの明るい色は鮮やかで目が痛い位だった。)

## IV 世界はかくの如し

デイヴィッドはヤーマスで二週間楽しくのんびりと過ごすのだが、兄ペゴティの姪エミリーと出会う。後にエミリーはデイヴィッドが出会う魅力的な自然児スティアフォースと出奔し、エミリーは彼に捨てられ、スティアフォースは船の家を破壊することにもなる嵐に飲みこまれ最後を遂げ、ハムも、この時、亡くなる。ペゴティ兄妹がエミリーを連れてオーストラリアに移民に行くことを思うと信じられない程であるが、今は小春日和のような毎日をデイヴィッドは楽しみ、夢のようにエミリーが好きになり、彼女もデイヴィッドが好きになるのである。兄ペゴティが快活に酒を飲んだりして過ごす姿が家族のような人たちのなかで父親の役目を果たし、デイヴィッドは生まれて初めて生地を離れ、最高の待遇で持って歓待されているのである。それはデイヴィッドが引用の寝具で寝る一方、ペゴティ兄とハムがハンモックで寝るところなどに示されている。慎ましいが、大した不足もない、平穏な毎日がありデイヴィッドは日々のさまざまなかぎごとを思い浮かべながら深々と眠ることができるのである。読者は安心して話の叙述をたどることができる。ここにはT.S.エリオットがその古典論のなかで述べている、古典の要諦のひとつ、包括性(comprehensiveness)が実現されている。世界はかくの如し、これに尽きるというわけで、読者は深々とその世界に沈潜できる。沈潜できるのみならず、認識が獲得され、当然のこと行動が変わるわけで、その言葉を共有する人々の幸不幸に繋がると言っても過言ではないのである。いま一つ『デイヴィッド・カッパーフィールド』で包括的な描写が実現されているところを見てみたい。

ヤーマスから帰るとデイヴィッドはマードストーンが新しく父親になったことを知らされデイヴィッドは彼にセーラム校に追いやられる。ある日のこと、校長クリークルが調子悪く休むと、学校が騒がしくなり始める。

If I could associate the idea of a bull or a bear with anyone so mild as Mr Mell, I should think of him, in connexion with that afternoon when the uproar was at its height, as of one of those animals, baited by a thousand dogs. I recall him bending his aching head, supported on his bony hand, over the book on his desk, and wretchedly endeavouring to get on with his tiresome work, amidst an uproar that might have made the Speaker of the House of Commons giddy. Boys started in and out of their places, playing at puss in the corner with other boys; there were laughing boys, singing boys, talking boys, dancing boys, howling boys; boys shuffled with their feet, boys whirled about him, grinning, making faces, mimicking him behind his back and before his eyes; mimicking his poverty, his boots, his coats, his mother, everything belonging to him that they should have had consideration for.

(大意：メル先生のような人を牛とか熊で思い浮かべるなら、あの日の午後、騒ぎが一番ひどくなったときなど、たくさんの犬に寄ってたかっぺいじめられている光景が思い浮かぶ。その時、先生はずきずき痛む頭を骨の目立つ手に乗せ、机の本を読みふけり、下院議長なら卒倒しそうな喧噪のなか、みじめな様子で退屈な仕事を黙々と進めているのです。生徒の方は席を立ったり、座ったり、動き始め、陣取り遊びをしている。笑っている子がいるかと思えば、歌を歌う、しゃべる、踊る、大声でわめくなど色々出てくる。靴を引きずる子、先生のまわりをぐるぐる回る子、そうしながら笑ったり、しかめっ面をしたり、



後ろから、また目の前で先生の真似をする。その貧乏な様子、靴、服、先生の母親、その他先生のついでとあらゆること、普通なら、抑えておくようなことを開け広げに真似るのです。)

当時の有りえたかもしれない学校の、これも有りえたかもしれない一風景をこれでもかと言うばかりに、戯画になる位、思う存分、その混乱振りを描いている。Dickens's land と呼ばれる世界に読者は安心して遊ぶことができる。そう学校というのはこんな風にも、時にはなるのだ。確かにそうだ、大体こんなものだ、これで尽きてしまうと読者は描写の言葉に身を任せながら読み進むのである。喧噪は次ぎのような終わり方をする。

I am not clear whether he was going to strike Mr Mell, or Mr Mell was going to strike him, or there was any such intention on either side. I saw a rigidity come upon the whole school as if they had been into stone, and found Mr Creakle in the midst of us, with Tungay at his side, and Mrs and Miss Creakle looking in at the door as if they were frightened. Mr Mell, with his elbows on his desk and his face in his hands, sat, for some moments, quite still.

(大意：スティアフォースが先生に殴りかかったのか、先生がスティアフォースに殴りかかったのか、どちらにその気があったのかわからない。はっきり見えたのは学校全体がまるで石になったかのようにしんと静まりかえったのだ。見るとクリークル校長が教室の真ん中に立っていて、そばにタンゲイが控えていたのです。それに校長の奥さんとお嬢さんまでがびっくりした様子で教室の入口に立って中をのぞきこんでいたのです。メル先生は両肘を机につき、顔を両手にうずめ、しばらく、身動きせず、じっとしていました。)

動から静への見事なコントラストのはっきりした描写である。魅力的な生徒の中心スティアフォースを登場させ、一瞬にして、学校側の中心人物クリークル校長と個性的な足が義足のタンゲイをつけ、さらに騒動のひどさを強調するかのように校長一家まで登場させ、最後に責任の当事者を無言のうちに提示し、その無能さを暗示するなど心憎いばかりである。大事なのは事の一部始終を展開叙述している筆致にある。イギリス的普遍性が、ユーモラスにさりげなく達成されているといえる。

#### 注

1) テキストはCharles Dickens, David Copperfield (Penguin Books, 1966) を使用している。

#### 参考文献

- Charles Dickens, *Christmas Carol* Kenkyusha, Tokyo 1949  
『世界文学全集12 ディケンズ デイヴィッド・コパーフィールドI』新潮社 1963  
柏木隆雄『謎とき「人間喜劇」』ちくま学芸文庫 2000

Charles Dickens *David Copperfield*  
— *English Modes of Life* —

IBATA Kimio

*Tennoji Senior High School attached to Osaka Kyoiku University*  
*Osaka 543-0054 Japan*

It is a long time since we heard the term "Understanding foreign cultures". All things foreign seem to be connected with their own cultures, but we have often found them superficial in its own culture when we studied them closely. However it is effective and enlightening to study a language and read its masterpieces, if we want to be involved in some culture better and more deeply. In excellent literary works, something total or comprehensive is shown precisely and elaborately. Japan or the Japanese language is well embodied in *The Makioka's sisters* by Jun'ichiro Tanizaki. Likewise we see many, unique English modes of life in *David Copperfield* by Charles Dickens, an English national writer. When reading *David Copperfield*, we feel to be faced with English-ness in various ways. It is a world where we could enjoy and indulge ourselves freely.

Key Words: description, a picture, a city